

武智スマ氏 ㈱武智商店代表取締役社長

「生涯現役」という言葉があるが、今治の数あるタオルメーカーのなかでも武智スマ氏ほど、この言葉がピッタリな人は他にいない。御年 82 歳。年齢を感じさせない働きぶりは、業界では有名である。1967 年の武智商店創業から現在まで、約半世紀の間、会社を指揮し、どんな問題に遭遇しても取引先との「信用・信頼」を一番に考えながら、365 日、ひた向きに働いてきた。武智商店を知る人びとが口をそろえて、「困ったときの武智」、「頼みの武智」と言うほど、業界での信頼は厚い。




武智スマ氏

たけち・すま ☆ 1933 年、越智郡伯方島生まれ。6 人兄弟の長女として誕生。第二次大戦中に尋常小学校に入学し、小学 6 年生のときに終戦を迎える。1952 年に縫製業「矢野喜八商店」を営む叔母の養女に入り、家業を手伝う。1961 年に結婚した後も叔母の手伝いをしていたが、1967 年 4 月に独立してタオル専門問屋「武智商店」を創業。1986 年の法人化と同時に取引先のタオルメーカーの工場を買いとってタオル製造にも着手。1990 年代以降の苦境を乗り越え、現在も「信用・信頼」をモットーにタオルを製造しつづける。




1. 伯方島に生まれて

武智スマ氏の生まれ故郷は、瀬戸内海にうかぶ長閑な小さな島、伯方島である。伯方島は、塩の生産でその名が全国に知られているが、四方八方海に面しているだけあって漁業や海運業が盛んな場所である。武智氏の父親は、船を所有し海運業に従事していた。親類縁者も同様に、船で生計を立てていた。

武智氏が生まれた1933年は、1929年のアメリカ・ニューヨークの株暴落をうけて世界的な経済不況が訪れたあと、世界が**ブロック経済**  化していったときであり、各国は経済的にも政治的にも対立の度合いを深めていった時期である。そんな暗雲がたれ込めるなか、日本は1937年の日中戦争をへて太平洋戦争に突入していく。



1939年に**国民徴用令**  が発布され、父親は、機帆船を所有していたため一時海軍に所属したが、父親の兄が徴用によって船も命もなくした影響で、船を売りフリーの身となった。


武智氏は、6人兄妹弟の長女として誕生し、上には兄が1人、下には妹2人、弟2人がいた。赤ん坊の頃、父親は内航で忙しく母親も働いていたため、母方の祖母に育てられた。戦争中に入学した尋常小学校は、途中で国民学校に校名が変わり、6年生になった卒業時には高等小学校となっていた。戦争に翻弄された小学校時代は、幼いながらまともに勉強した記憶がない。

終戦後、国民はゼロからの復興を強いられ、みな一生懸命に働いた。武智氏は当時を振り返って、「昭和ひとけた一桁時代の子供は、戦争に負けたのち復興という言葉ひとつのために日夜働いた。そんな時代に、義務とか権利などという言葉をお口にしない人はいなかった。朝は朝星、夜は夜星と、一生懸命体力のつづくかぎり、みな働いていた。」と語る。

2. 矢野家の養女となる

1952年、武智氏は、19歳のときに伯方島を出て今治に住むことになった。母親の妹が今治で衣服の縫製加工・販売をおこなっていた矢野喜八商店に嫁いていたが、後継ぎの子宝に恵まれなかった。そのため、6人も子供がいた村上家に養子縁組の話がもち上がり、長女の武智氏が矢野家の養女となったのである。

矢野家に入って最初の3年ほどは縫製と店番の手伝いをしながら、取引先のある東京や名古屋などに出掛けて営業もこなした。屋号にもなっている事業主の矢野喜八氏は、店内にお客さんが入ってきたら隠れるほど、商売人としてはあまりにシャイで無口な性格だった。そんな矢野氏に代わって店頭でお客さんの相手をしたのが、武智氏であった。

問屋への営業活動をとおして、武智氏は多くの情報を得た。ある日、東京の取引先から「今治といえば、やっぱりタオルでしょう」と言われ、それまで矢野喜八商店では衣服しか扱っていなかったが、この一言で昭和30年に入った頃よりタオル販売に商売を切り替えていった。こうして、当時爆発的に売れていたおぼろタオル  をタオルメーカーから仕入れ販売するようになり、地元のタオル専門問屋に衣替えしていった。この舵取りをおもにやったのが武智氏であり、矢野喜八商店で商売の面白さを覚えていった。



おぼろタオルの表面（細番手綿糸を使用

した軽く肌触りのいいタオル）

20代の若い武智氏は、矢野喜八商店での仕事はもちろん、その他にも精力的に実学を身に付けていった。昼間は矢野喜八商店で商売に専念し、夜はむつみ洋裁学校（現・むつみ服装専門学校）で洋裁を学び、今治高専（現・愛媛県立今治高等技術専門学校）で簿記とそろばんを学んだ。昼間の営業活動に必要なということで、1960年には運転免許証も取得し

た。この頃、自動車の運転免許取得をめざす人のほとんどが男性であり、受験生 102 人のうち女性は武智氏 1 人だけだった。実地試験にくわえ身体検査もあったが、男性の中に女性一人とあって武智氏だけ検査なしで合格した。こうして、一年 365 日、朝から晩まで、体を動かした。



20 代の頃の武智スマ氏



実学の他に趣味も楽しんでいた

（写真：武智スマ氏提供）

矢野喜八商店の看板娘は、いまで言うキャリアウーマンさながらの働きぶりで、気が付けば27歳になっていた。日々忙しく走り回っていたので、矢野家の人びとの誰もが結婚という二文字を武智氏に期待しなかった。そんな折、同い年の友人は武智氏に会うたびにこう言った。「結婚してないのは、もう誰もおらんよ。あんたひとりよ。」友人の何気ない言葉に導かれるように、武智氏は「まあ、とにかくお嫁に行くだけ行って、帰ってこよう」という気持ちで、見合いをすることにした。（次号につづく）

